

闘病の子と家族支援

宿泊施設「ファミリーハウス」5年

鹿児島県内の小児科医らでつくる認定NPO法人「こども医療ネットワーク」が、鹿児島市内の病院で闘病する離島やへき地などの子どもと家族のために開いた宿泊施設「鹿児島ファミリーハウス」が、丸5年を迎えた。これまでの利用登録者数は県内外の272人。病気治療の不安に加え、交通費や滞在費など重い経済負担を強いられる家族にとって、ハウスはつかの間の癒やしを得られるやすらぎの場として定着している。(吉松晃子)

奄美市の里かおりさん

(45)の三男聖斗君は2008年6月、急性リンパ性白血病と診断され、鹿児島大学病院に入院した。退院までの9ヶ月間、かおりさんは聖斗君の眠り、病棟のベッド脇で添い寝する生活。寝返りは打てず、プライバシーもなかつた。

ハウスは、同市鴨池2丁目にあるビル内の3室

2人が病院から出られるのは、月に1回ほど許される外泊時だけ。そのため離島に帰るのは経済的に難しい。ハウスを借り、自分が部屋を無償提供し



ファミリーハウスの1室を案内する中間初子さん。桜島が望める1番人気の部屋だ
—鹿児島市鴨池2丁目

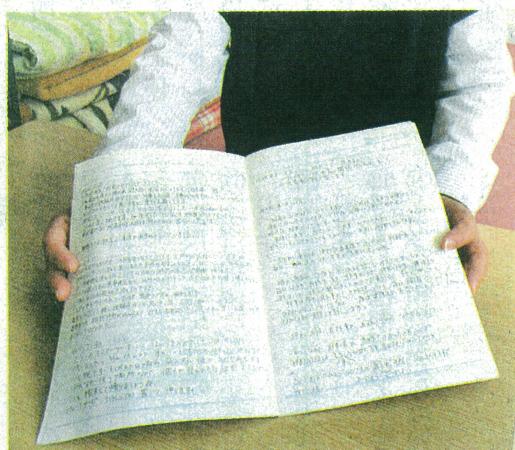
部屋で手足を伸ばしていくつろいだ。ときには島から家族を鹿児島市に呼び、ハウスで過ごすこともあった。

その後、聖斗君は退院し、「元気に小学校に通つ

検診時は、今もハウスを利用する。「私たちにとってハウスは第2の我が家。単なる宿泊施設ではなく、ほつと一息つける癒やしの場所」と感謝し、「これからもずっとハウスが続いていい」と願う。

◆◆◆

鹿児島市『善意頼み、運営に課題も



「ハウスノート」。闘病中の利用者が自由に書き込む

どを一手に引き受ける。中間さんも子どもが急性リンパ性白血病を患い、長い治療を経験した。「精神的にも肉体的にも看病する家族はつらい。ここを利用するときだけでも、やすらいでもらえた」との思いで続けてきた。

ハウスの管理運営費は年間約150万円。利用料金を超える分は、NPOへの寄付金から支出する。「部屋の提供やボランティアの存在がなければ到底続けられない」と河野理事長。『善意頼み』の運営は、部屋の持ち主の事情が変わったり、寄付金が減れば、閉鎖に追い込まれる可能性はある。

希望者が重なり、利用を断る時期もあるため、部屋を増やしたい思いも。河野理事長は「無理をしない範囲で長く続けることが、子どもと家族を支えるために重要なこと」と語っている。

同NPOの河野嘉文理事長(鹿児島大学病院小児科教授)は「経済的負担の解消だけでなく、家族が気分転換しながらき

所後の清掃、寝具交換な

どに誰かと顔を合わせることはない。気兼ねなく使つてもらつたための配慮といふ。

同NPOの河野嘉文理事長(鹿児島大学病院小児科教授)は「経済的負担の解消だけでなく、家族が気分転換しながらき

所後の清掃、寝具交換な